

ロールシャッハテスト形態水準評定の再検討

内 田 裕 之¹⁾

I はじめに

ロールシャッハテストは、10枚のインクプロット（漠然図形）を提示し、それが何に見えるかを求める検査である。今日、投影法の一つとして位置づけられ、その反応内容の検討から被験者の無意識に迫る技法と考えられている。しかし、創始者 Rorschach (1921) はこの検査を「無意識からの自由な産物をもたらすものではなく、与えられた外的刺激への順応を要求する。すなわち《現実機能》の行動」と考え、「何に見えたか」という内容面よりも「いかにして見えたか」という形式面を重視していた。

このように独創的な見解を持ちながら、十分にこのテストを発展させることなく、Rorschach は翌1922年に死去してしまう。その後、このテストはアメリカに渡り、Rorschach から直接手ほどきを受けていない研究者によって発展され、いくつかの体系が生まれた。

このため、解釈仮説およびスコアに不一致が見られる。例えば、Rorschach が体験型と並んで重視した把握型に関連するロケーションの分類法（大きく Beck 流と Klopfer 流の相違）、彼がほんの少ししか着手できなかった濃淡ないし陰影反応の取り扱い、彼が軽視した内容分析にからむコンテンツ記号、Rapaport 法の逸脱言語表現 (Deviant Verbalization) のような新しく設けられたカテゴリーなど、枚挙に暇がない。

その中で、本論では、形態水準評定の問題を取り上げたい。形態水準評定とは反応の質的な評価のことであるが、そもそも漠然図形に対する反応を質的に評価・分類すること自体困難な課題で、諸家によって着目点が異なってくるのは当然のことと思われる。したがって、それらを含括・統合することは極めて困難な作業であるが、諸説を見ていく中で、どの体系に準拠していても実際に形態水準評定を行なう上で、押さえておくべき検討点を浮き彫りにすることを目的とする。つまり、諸家の着目点

を反応におけるニュアンス、心理学的意味を記述する言語と読み替えることで、個々の反応の質的評価ひいては解釈の一助となると考え、以下に論を進めたい。

II 形態水準評定の歴史的展開

まず、形態水準評定をめぐる諸家の見解を簡単に紹介してみる。このような概観は、すでに片口 (1960, 1974) が行なっているが、ここでは片口自身の見解およびその他の取り上げられなかった研究も含めて、形態水準評定の展開をまとめてみよう。なお、Rickers-Ovsiankina (1960) は諸家の形態水準記号を対比すべく一覧表を作成しているが、必ずしも一義的に対応しない部分があり、誤解を招くと思われたので、筆者はあえて図表を用いることは避けた点を明記しておきたい。

1. Rorschach

Rorschach (1921) は、形式的側面を重視し、反応の成立を考慮して、反応の良か否かの評価を行なう必要を感じ、次のように述べている。

「大抵の判断は、一般的に言っても、個々の検査についても、偶然的図形の形態によってのみ決定される。それ故に、この形態反応を評価することが問題となってくるのである。この際、主観的な評価をできるだけ除くために、統計的な方法が用いられた。このため、多くの健康な被験者（約100名）が、最も頻繁に答えた形態反応を、標準及び基準として用いた。こうして形態知覚の一定の正常の範囲、すなわち、多くのしばしば繰り返される反応が明らかにされた。これが良い形態 (F+) と名づけたものである。この場合、主観的な評価では、良い形態と判断されなかった判断でも、F+と評価されねばならないことがかなりあった。これらの形態反応に比べて、もっと良い反応も同じく F+とされ、比較的不良の、不明確に見られたものを F-とした。たとえ正常の範囲が、統計的に確立されたとしても《良い》標準反応より、良いとか良くないなどの判断は、なお主観的な自由選択の余地を幾らか

1) 名古屋大学大学院博士課程（後期課程）

残しているのである。しかし、どんな形態が標準反応より良く見られているか、見られていないかということは、かなりはっきりと決定することができる。」

この記述から、彼は形態水準の判定基準として健常群での出現頻度を参考にしたが、必ずしも頻度だけで決定できるわけではないと考えていたことが読み取れる。また、「もっと良い反応」と標準反応をF+と一括処理したもののその差異には気付いていたこともわかる。

2. Beck と Hertz

Beck (1961) は、実験心理学的アプローチを重んじ、Rorschach の出現頻度に基づくF+の決定を踏襲している。具体的には、頻度の検討により、外界を正確に認知し、良好な知的統制をもつ平均的ないし優秀な知能をもつ人に見られる反応をF+とし、精神薄弱者や精神病者に見られるが正常者には現われない反応をF-と設定した。なお、出現頻度に基づいているため、当然ながらそもそも出現頻度の低い微小なDd反応に対しては、F+とF-の設定ができず、単にFとされている。

さらに、Beck (1976) は、①新たな基準に基づく変更がない限り、同一反応を常に+または-とスコアすること、②リストにない反応は、その形態がリストにある反応とどの程度類似しているかで評定する、と強調している。しかしながら、実際には、リストにない反応の評定は困難な場合があり、Phillips & Smith (1956) の改良へとつながった。

また、出現頻度に基づくリストとして、Hertz (1961) も挙げられる。彼女は、Beck に続いてこのテストの標準化に着手し、300名の健常青年に13回以上出現した反応をF+とした。また、このリストは極めて膨大で、微小なDd反応も取り上げられている。こうした反応や評定に迷う反応の決定については、Rorschach の「主観的な自由選択の余地」という記述に基づいて、複数の評定者による合意という手続きを導入し、Beck の手続き上の欠点を克服したといえる。しかし、健常青年という被験者のサンプリングが適切であったかどうかということが問題視されている (片口 1960, 1974)。

その後の研究で、Beck と Hertz のリスト間で不一致が見られ、サンプルの問題、頻度だけではとられない側面が浮きぼりになり、リスト法の限界が指摘されることとなった。また、単に二分法では反応の微妙なニュアンスがとらえられず、他の体系では新しい形式の形態水準評定が設定されていった。

3. Klopfer と片口

Klopfer (1954) は、形態水準が被験者の能力の解釈

の上で重要であるとして、F+, F-の二分法から離れて、独自の形態評定法を確立した。すなわち、被験者が自分のみだ概念をプロットの形態に適合させる能力、自分の反応を説明して明細化する能力、およびプロットの各部分を意味のある広い概念に結合させる能力の程度を評価することに注目した。すなわちプロットへの適合性、明細化、結合性という3点を総合的に評価することを提唱した。

具体的な手順としては、まず、プロットへの適合性に関して、以下のような基本点を付することから評定が始まる。① 基本点1.0：確定的形態概念で、プロットに適合しているもの。② 基本点1.5：人間の顔、人間像、特定の動物など、基本点1.0よりも形態確定性の高いもの (但し、カードⅢ、カードⅧのP反応は、プロットの規定性が大きく、容易に産出できるため、1.0となる)。③ 基本点0.5：漠然とした、半確定・二次形態反応。④ 基本点0.0：非形態・無形態反応。⑤ 基本点-1.0：プロットに適合させようと何らかの努力をしてはいるが、正確さのための必要最小条件を満たすことができない。⑥ 基本点-1.5：概念がプロットの一部にしか適合していないのに、プロット全体に対して反応し、概念とプロットの形態との間の差異を無視してしまう作話反応 (DW)。⑦ 基本点-2.0：確定的形態概念で、プロットに明らかに適合していない。

次に、明細化について、Klopfer は④建設的明細化、⑤無関係な明細化、⑥破壊的明細化に分けて論じている。④は、概念の細部の説明がプロットに適合している場合や決定因の明細化を指し、⑤は、例えば「おじぎをしている人」反応に対して「背中を曲げている」という具合に、すでに明らかであることを単に言い換えただけで、適合性を高めも低めもしない場合である。⑥は、プロットの適合性を弱めたり、破壊してしまったりする場合で、例えば「動物の顔」に「目が4つある」と説明するなどである。

結合性については、現実調和的な結合と奇妙な結合とに分けられる。前者については特に説明の必要はないと思われるが、後者の例として「水中を泳いでいる人が蛙と握手している」が挙げられよう。

この明細化と結合性に依じて、上記の基本点に加算と減点が行なわれる。建設的明細化が見られたり、結合性が生じた場合、それら一つ一つについて基本点に0.5点ずつ加算を行なう。但し、評定の上限は5.0で、マイナスの基本点に加算は行なわない。他方、減点は、正確さを弱める明細化や奇妙な結合性に対してなされ、0.5点を減じる。なお、評点-0.5は、基本点ではなく、1.0水準の反応が不正確な明細化や結合性によって弱められ

た時の減点により、引き下げることで生じる。

一方、片口法は、基本的には Klopfer 法の日本での標準化だが、形態水準が簡便化された。そのため、Klopfer の形態水準評定を難解・煩雑と感じた人々に受け入れられ、我が国で最も多く用いられている体系となった。なお、片口（1960）から片口（1974）の間で形態水準に関する改定が行われており、旧法では、二次・半確定形態と無形態・非形態反応は評定の対象としなかったが、新法では全ての反応に評定を行なうよう改めている。その具体的操作を含め、以下に紹介する。

- ① 優秀水準（+）は、次の良好水準の反応で正確さ、建設的明細化、結合性の優れた反応に付する。Klopfer 法でいくと、加算が行なわれた反応と考えればよい。
- ② 良好水準（±）は、P 反応およびそれに準ずる反応に対して付する。Klopfer 法の 1.0 水準と 1.5 水準に当たる。
- ③ 許容水準（干）は、片口法独自の考えで、明細化能力不足および的確度を弱める明細化のある場合（後者は Klopfer -0.5 に当たる）に評定される。つまり、±水準の反応に必要な最低限の明細化がなされない（「何となく」としか説明できない）場合は、干水準として処理する。この「何となく」としかいわない反応態度は、名大法の思考言語カテゴリーで incapacity of explanation あるいは vagueness に当たるが、これを形態水準評定に導入したことが特徴的である。
- ④ 不良水準（-）は、正確さ・プロットとの適合性のみられない反応、破壊的明細化のある反応、現実的調和を欠く結合性のある反応、すなわち病理水準が疑われる反応に対して評定される。なお、片口は-水準として一括しているため、病的な障害の程度の検討に関しては逸脱言語表現の利用を勧めている。

その後、片口（1974）は、二次・半確定形態反応を干水準に含め、無形態・非形態反応を-水準に含めるように改定した。しかし無形態・非形態反応を-水準とする点は、形態との複合性と反応の良否を混同しているといえる。片口は簡便さを追求するあまり、反応の微妙なニュアンスの検討をなおざりにした感が否めず、こうした点が片口法の限界であろうと思われる。

ここで、Klopfer 法に対する田中（1957）や片口（1960）の批判も紹介する。彼らは、Klopfer 法が 0.5 点刻みの 15 段階のため複雑・煩雑であり、最高値 5.0、最低値 -2.0 という尺度構成に問題があると批判している。これは彼らが 15 段階ということにこだわりすぎているためと思われる。筆者は Klopfer 法に準拠しており、その実感からすると、評定はあくまで基本点を定めるこ

とから始まるのであり、むしろ 7 段階評定と理解した方が妥当と思われ、彼らの批判がいささかのはずれな感が否めない。

しかしながら、こうした批判を生む要因として、反応の質を検討する形態水準評定は名義尺度水準であるのに、Klopfer が間隔尺度水準で扱っていることが挙げられる。むしろ数字でラベリングした名義尺度であると認識すべきかもしれない。確かに方法上の問題はあがあるが、形態の確定性（基本点 1.0, 0.5, 0.0）やマイナス水準における障害の程度（基本点 -1.0, -1.5, -2.0）を連続性のある事象として、単に F+, F- の二分法ではとらえられない評価を行なっているという点は注目できよう。

4. Phillips & Smith と阪大法

Phillips & Smith（1953）は、Beck のリストの限界を感じ、基礎形態、彫琢、コンテンツクラスという考え方を導入して修正を行なった。

彼らは、全ての反応は基礎形態を持ち、ある反応は基礎形態の彫琢を含んでいる、と考え、それらを区別することで、形態水準評定を整理しようとした。例えば、「人間」反応には人間のもつ基礎形態しか含まれていないが、「アクロバット」には人間の基礎形態とアクロバットという彫琢が含まれている、と考えるのである。そして、その基礎形態に関して、プロットの構造に対する基本的要請（例えば、人間ならば、頭部が明確で、その幅よりも長い胴体、腕・足に当たる細長い突起という要請がある）によって、Beck のコンテンツを 7 つのクラスに分類した（紙面の都合でクラスについては説明できないので、原著にあたられたい）。

また、F- を以下の 4 段階に分類した。レベル 1は、F+ の基準を最小限に侵害した反応（レベル 1 には二つの規則があるが紙面の都合で割愛する）。レベル 2は、レベル 1 よりも反応とプロットの構造との矛盾が見られるが、プロットと全く無関係ではない。残る二つは全く恣意的な反応だが、レベル 3はプロットの構造・境界を侵していないが、レベル 4は構造・境界をも侵している点で異なる。

一方、彼らは、Beck のリストをコンテンツクラスに従って分類・再配列している。この配慮により、リストにない反応でも概念が類似した特性を持つかどうかで F+ か F- かの決定の手がかりが得られる。また、F- と評定した場合、どのレベルに当たるのかを考慮する上でも参考になる。

しかしながら、彼らの試みは Beck のリストの改善につながったが、やはりリスト法にとどまっているため、

限界があるといわざるをえない。阪大法は、基本的に Klopfer の考え方にに基づき、Phillips & Smith の方法を取り入れて独自の形態水準評定を確立した。すなわち、Klopfer の形態水準評定の3点（適合性、彫琢・明細化、結合性）に分けて評定するという考え方は踏襲しているが、適合性に代わり Phillips & Smith の基礎形態レベルの考え方を導入した。また、Klopfer 法では点数で示されていたが、記号化の標識と得点を分けて評定することで整理を試みている。

Phillips & Smith と阪大法の決定的な違いは、基礎形態レベルにおける形態のとらえ方の的確さの判定に関してであり、辻ら（1963）は、以下のように考えている。すなわち、平凡反応やそれに近い出現頻度の反応は、出現する領域が特定化されるように、プロットによる規定性の大きい反応といえる。一方、規定性の小さい反応や概念そのものの規定性が不明確な反応では、特定の出現する領域は認められない。それゆえ、これらの反応は形態のとらえ方が的確であるかどうか判定するよりも、むしろ判定の圏外に置くことを積極的に押し進めたのである。この考え方には、Klopfer の0.5水準と0.0水準の考え方が生かされているといえよう。

この判定の圏外に置くべき反応は、出現頻度のみに関わる方法では明確にされないため、反応そのものを規定性の程度に応じて分類し、Phillips & Smith の7段階のコンテンツクラスを5段階に改良するに至った。紙面の都合で各クラスについて述べないが、第Ⅲクラス以下の反応が、判定の圏外に置くべき反応（許容反応、permitted response）として、プロットの形態条件を破壊しない限りは、Fpm とスコアされる。このように、基礎形態レベルの設定の基準を明確にしたことによって、形態水準評定が主観的独断に陥らないように工夫されている点が最も大きな特徴といえる。この評定法は、Beck の強調する出現頻度に基づいてはいないが、客観的な評定方法と考えることができよう。

5. Rapaport

Rapaport (1946) は、知覚的体制化という考え方を導入し、Rorschach のF+をF+とF±に分け、Rorschach のF-をF $\bar{+}$ とF-に分けた。F±は、本質的には良好反応だが、知覚的体制化のいづらか弱いもの、F $\bar{+}$ は、不良反応ではあるが、良好な知覚的体制がいづらか認められるものと定義されている。

また、さらに Rapaport は臨床的活用のため、質的分類として、① special F+, ② special F-, ③ Fo (ordinary), ④ Fv (vague) を考案した。つまり①は明確で限定的かつ説得力のある反応、②は限定的

だが恣意的な反応、③は凡庸だが容認できる反応、④は頻繁に見られるが適当ないし漠然とした反応、と説明されている。そしてこの分類法は後述する Mayman に大きな影響を与えた。

6. Mayman と Exner

Mayman (1970) は、Rapaport 法を受けて、以下に示す独自の形態水準評定を考案した。

① F+ : 想像力（連想・概念）と現実（プロットの構造）とがうまく結合している。② Fo : 明白で容易に気がつく反応で、ほとんどあるいは全く創造的な努力を要さない。P 反応およびそれに準ずる頻度の反応。③ Fw+ (weak) : 納得できないが恣意的とはいえない反応で、プロットの形態と与えられた反応とに衝突が見られない。④ Fw- : ほんの一部、イメージとプロットの形態が一致しているかもしれないが、残りのプロットの特徴がほとんど関係ないだけでなく、概念に不調和をもたらしている。⑤ Fv : あいまいで非関与的な反応（非現実的ではない）。以下、非現実的となり、⑥ Fs (spoiled) : 反応の大部分は良好に見られているが、一部分がひどく誤認された著しい歪みのある反応で、部分的な現実との接触の喪失を表わす。⑦ F- : 思考障害ではなく、全く恣意的な知覚で、被験者はプロットの特徴にないものを見ている点で、現実との接触が損なわれている。

Mayman はこの形態水準評定により、プロット刺激に対する態度から、被験者の現実との接触をとらえようとした。そして、病理学的指標として、たとえ一つでも Fs か F- が見られた場合、ポジティブに考えても、せいぜい現実に対してあまりにも無頓着な態度をとっているとしか考えられず、最悪の場合、顕現的な精神病水準の現実放棄を表わすとしている。

一方、Exner (1986) は、既存の体系の実証的研究を経て包括的システム（Exner 法）を体系化した。これは良くいえば諸説の統合、悪くいえば寄せ集めの構成になっている。その内、形態水準に関しては、Mayman 法に着目し、検討を行なった。

その結果、Fv と Fs は評定者間の不一致から削除し、Fw+ と Fw- を区別せずとめ、最終的に、+水準と o 水準を「形態が適切に用いられ、よく適合していることを表し」、w を u 水準 (unusual) に改変して「形態の適切な使用は著しく歪められてはいないが、きわめて少数の被験者しか述べない反応」と定義し、-水準を「形態の使用が不適切もしくは歪曲された反応」として、4つのスコアに定位した。

Exner 法の特徴として、u 水準を設定したことが挙

げられる。これにより、出現頻度は低いプロットに適合している反応の処理を可能にした。その結果、Beck法で評定不能と扱われていた反応、Hertz法で複数の評定者の合意によりF+と定位されたが二分法ゆえ頻度の高い反応と同じ記号で処理されてしまって、そのニュアンスの検討ができなかった反応の問題に一応の解決をつけたといえよう。つまり、Rorschach および Beck や Hertz ではF+と一括されているところを、優秀水準(+)と平凡水準(0)に区別したといえる。

しかし、Maymanが診断上重要な指標になると考えた-水準を「全ての群の圧倒的多数の被験者は、一つ以上のマイナス反応を答えている」と出現頻度の重視から、Maymanの強調した現実との接触という心理学的意味を希釈・軽視している。結局のところ、Exner法の形態水準評定は出現頻度に基づいたリスト方式であり、Maymanを支持したというよりは、むしろBeckやHertzのリストの改良に過ぎないという皮肉な見方もできるだろう。

III 形態水準評定の積極的活用のために

日頃、初学者のスコアを見ての印象だが、血液や爆発、傷ついた人間像などの反応に、プロットの適合性を考慮することなく、F-を付していることが案外多いことに気づく。このように、このテストの形態判断という考え方に慣れていないと、内容が不快なものであることからF-とされがちのように思われる。このことから想像するに、Rorschachが「主観的な評価をできるだけ除く」と述べたことは、不快な反応内容イコール悪い反応のような評定者の連想・印象に基づく良否の判断を避けて、反応内容ではなく形態を評価することを強調しようと配慮したことの間接的な現われではなかろうか。形態水準評定は、あくまでも形態を評価すべきであって、いわば「感情」水準、「不快」水準を評定すべきではない。それらは内容分析に盛り込むべきである。また、こうして評定されたF-の混在ゆえにF+%が低下し、そのために自我の弱まりが所見されてはならないだろう。

また、自分にその反応が見えるか見えないかを頼りにして、見えないとすぐにF-を付する人が多いように感じている。河合(1987)は「僕なんかは何でも見える方として、相当変な反応でも抵抗なくそう見えました」と述べているが、ここで抵抗なく見えるといいながら「相当変な反応」と自覚があることが興味深い。この記述に見るように、評定者に「相当変な反応」と感じることでF-と評定することには若干のズレがあることが示唆される。このように主観のみに頼ると、下手をすると、被験者の反応から引き起こされた自身の感情・感覚に対す

る評定になりかねない。

極端な言い方をすれば、こうして評定された形態水準は被験者の形態水準ではなく、テストの形態水準だとさえいえるだろう。それを避けるためには、ある程度安定した評定基準というものがどうしても必要となってくる。そこで、前章では主として諸説の成り立ちについて紹介したわけだが、評定という作業はいわば反応のエッセンスを抽出し、反応の心理学的意味を記述する作業といっても過言ではない。したがって、反応の心理学的意味の理解を欠いては、適切に評定しようとしても片手落ちといえよう。本章では、まず、出現頻度による選定という手法を用いて得たF+反応がいかなる心理学的意味を持つのか考えてみる。

1. 出現頻度を手掛かりに

出現頻度によって選定したF+反応の代表として、P反応およびそれに準ずる頻度の反応が挙げられる。P反応は、研究者によって幾分基準が異なり、サンプルの違いもあって必ずしも一致しない部分があるが、総じて、ある特定のプロットに対して特定の反応内容が多くの人に認められる、ということを示している。このことから、そのプロットの特長によって誰もが容易に産出できる、つまりプロットによる規定性が働いていることが読み取れる。

辻(1987)は「良質の形体反応の産出は、漠然図形という外材の絶対的な依りかかり枠のない条件のなかから、識別的な条件の重要性をわきまえてそれを選び出し、増強する細部的な不一致点の中で、押さえておくべき一致点を押さえ、不問にしようとする不一致点を不問にする、という主体性によって可能となります」と難解な記述している。プロットの規定性という条件をこの枠組みの中で考えてみよう。

例えばカードIWのチョウチョは極めて多くの人が産出する反応である。ここでは、プロットによる規定性が働き、そこに依りかかることができるため反応産出が容易になっていると考えられる。いわばプロットからヒントがもらえるわけで、プロットへの依りかかりが相対的に大きくなるため、反応産出が幾分容易になる。ここで、プロットへの依りかかりに比重がかかればそれだけ自分を頼りにすることへの比重は軽くなることも注目しておきたい。(注：カードIが導入カードとして適切であることはつとに指摘されることだが、それはこのような事情によると考えられる。また、P反応が産出されなかった場合、限界検査で取り上げなければならないこともこの点に関連している。)

極端な言い方をすれば、カードIWでチョウチョを

認めることは、 $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ の写真を見て $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ と答えることと連続性がある。しかし、厳密に言えば $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ そのものではなく、漠然図形として相対的に $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ に似ているということであって、絶対的に $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ なのではない。河合(1987)は、ある強迫神経症者がカードIに対して「 $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ に見えない」と反応し、 $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ に見えない理由を丁寧に説明した例を挙げている。この例を辻(1987)の記述に当てはめるなら、 $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ を想起したように識別的な条件を選び出すことはできたが、 $\text{C}\text{O}\text{U}\text{C}\text{O}$ に似ていないことに目が行きすぎ、不問にしうる不一致点を不問にできなかったと考えられる。

一方、藤岡(1964)は「反応は一般にある程度の限定を受けた内容と、その内容が現実持っている形、およびそれがあてはめられたプロットの形のあいだの、ある程度のくいちがい、すなわちアソビと、を含んで成り立っている」と述べている。なお、ここでいうアソビとは、空想遊び、インクのみ遊びの「遊び」ではなく、自動車のブレーキの踏みしろのような間隔の感覚である。これは先の辻の記述でいけば、一致点を押さえることと不一致部の不問・許容・容認を含んだ感覚といえよう。

また、空井(1969)は、Rapaportの逸脱言語表現にみる「距離」という概念を用いて、元々無意味なプロットに対してピッタリ適合したものを想起することは困難であるから、多くの被験者はプロットの持つある程度の特徴と想起した概念のある程度の特徴とが一致したところで反応する。その典型はP反応であり、プロットの特徴がかなりの程度無視される、つまりプロットから離れてしまっている(プロットから距離がある)と説明している。そしてP反応を最も公共生のある適切な距離を保った反応とすると、プロットの特性を顧慮しすぎる場合、距離の喪失が生じ、逆にプロットの特性をあまりに無視する場合、距離の増大が生じる、と述べている。

辻(1987)では「押さえておくべき一致点を押さえ、不問にしうる不一致点を不問にする、という主体性」という具合に、形態判断における主体としての被験者に関する問題が焦点づけられており、藤岡(1964)や空井(1969)では反応における「程よい加減」という具合に、焦点が異なるもののほぼ同じ事象を記述している。

程よい加減に落ち着くことは、プロットの規定性に沿って顕著に似ている反応を産出する、という具合にもともと過度に個性的でなく月並みな考え方を生じてくる場合もあれば、プロットの構造と想起した概念との一致・不一致の推敲を経た結果の場合もある。にもかかわらず、どちらも一様にF+として一括され、量的分析において、現実吟味の指標であるF+%に集約されてしまう。しかしながら、個々の反応について、反応産出過程に目

を配り、反応の心理学的意味を検討することも、解釈において重要である。

そこで評定に際しては、単に適合しているか適合していないかという軸だけでなく、その反応は多数の人が容易に認めるということから読み取れる「程よい加減」といえるかどうかを検討する必要もある。この場合、Exner法のu水準、つまり頻度は低いが適合している、しかし評定において単にF+と一括してしまわない整理法といった工夫が有効であると思われる。

2. 実際の評定のために

Rorschach(1921)も述べているように、漠然図形の判断が適切かどうかの判定には基準が必要である。特に初学者のうちには自分を頼りにできない分、外在の絶対的な依りかかり枠として明確な判定基準を求めるのは当然のことである。しかしながら、判定基準リストを絶対視して形態水準を評定するのではなく、その被験者個人に立ち返って反応産出過程にまで目を配る必要はある。そのためには、リストを硬直した採点基準として絶対視してしまうのではなく、むしろリストからプロットの規定性を読み取る。この習慣を通して、程よいアソビの程度がどのくらいであるか、という手ごたえを獲得していくことが重要である。

また、このようにリストの絶対視を避けることと並んで、反応とプロットとの一致・不一致をめぐるテストがめくじらを立てるあまり、アソビが許容できなくなることも避けねばならない。先の辻の見解にあるような「一致点のみを押さえて不一致点を不問にする主体性」をテスター自身が持たなければならない。しばしばロールシャッハテストは臨床家としての訓練に役立つといわれるが、辻のいう主体性は臨床家としての自己確立にも役立つものと思われる。

最後に、内容分析について少し触れておきたい。本論では形態水準評定から想起した概念とプロットとの適合性の度合い、そこで生じる識別的な能力と不一致を許容・不問にできる能力について扱った。一方、内容分析では、何ゆえ他ならぬその反応内容が選択されたのか、を主として取り上げることになる。そのためには、実際の解釈ではどうしても生活史や反応に対する被験者の連想、反応に対する素っ気なさ・熱心さといった態度など、このテストのプロトコルそのもの(狭義の反応)以外の情報と照合・総合することが必要である。また、プロットの規定性が働いていることも考慮に入れ、反応においてどこまでが判断でどこからが投影なのかを十分検討して、早まった内容分析に陥らないよう注意する必要があるだろう。

まとめに代えて

紙面の都合で諸説を十分に紹介できず舌足らずな感が否めない。また事例を提示して具体的に詳述したかったが、これは事例検討として別の機会に譲りたい。

書き終えてみて、諸説の紹介を行なった中である種のジレンマを感じた。それは、翻訳作業において適切な訳語が見つからない時に出会うジレンマに似たものであった。それは、研究者・利用者によって、このテストの理解がまちまちであることにつながっている。また、知覚判断か投影かの問題にしても、反応産出過程そのものが明らかでなく、ロールシャッハテストとは何かという問いに対する答えはまだ見つかっていないと言い換えてもよいだろう。そのことが形態水準評定の理解にもつながっている。

今後の課題としては、諸家の見解の一致点のみを拾い、簡略化に向けて最大公約数を見つけたり、Exnerのように統計を手がかりに取捨選択・整理し、ロールシャッハテスト版エスペラント語を構築するだけでは不十分であろう。むしろ不一致点に目を向け、不一致点が生じることをサンプルの問題といった具合に片付けてしまうのではなく、ロールシャッハテストに内包されている問題としてとらえるべきだろう。今後、研究・事例検討を重ねる中で、何らかの糸口が見つかることを期待したい。

文 献

- Beck, S. J., Beck, A. G., Levitt, E. E. & Molish, H. B. (1961) Rorschach's Test. I: Basic Process (2nd ed.). Grune & Stratton.
- Beck, S. J. (1976) The Rorschach Test: Exemplified in Classics of Drama and Fiction. Stratton Intercontinental Medical Book Corp. 秋谷 たつ子・柳朋子訳 (1984) ロールシャッハ・テスト: 古典文学の人物像判断. みすず出版.
- Exner, J. E. (1986) The Rorschach: A Comprehensive System Volume 1, Basic Foundations (2nd ed.). 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 (1991) 現代ロールシャッハ体系 (上). 金剛出版.
- 藤岡喜愛 (1964) ロールシャッハ・テストによるパーソナリティ像試論. 人文学報 (京大人文学研究所紀

要) 19.

- Hertz, M. R. (1961) Frequency Tables for Scoring Rorschach Responses (4th ed.). The Press of Western Reserve University.
- 片口安史 (1960) 心理診断法詳説: ロールシャッハ・テスト. 牧書店.
- 片口安史 (1974) 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.
- Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G. & Holt, R. R. (1954) Developments in the Rorschach Technique. vol. I: Technique and Theory. Harcourt, Brace & World, Inc.
- Mayman, M. (1970) Reality Contact, Defense Effectiveness and Psychopathology in Rorschach Form-level scores. Klopfer, B., Meyer, M. & Brawer, F. (ed.) Developments in the Rorschach Technique. vol. III: Aspects of Personality Structure. Horcourt Brace Javanovich.
- Phillips, L. & Smith, J. G. (1953) Rorschach Interpretation: Advanced Technique. Grune & Stratton.
- Rapaport, D., Gill, M. & Schafer, R. (1968) Diagnostic Psychological Testing (Revised ed. by Holt, R. J.). International University Press.
- Rickers-Ovsiankina, M. (ed.) (1960) Rorschach Psychology. John Wiley & Sons, Inc.
- Rorschach, R. (1921) Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungsdiagnostischen Experiments. Erunst Bicher. 片口安史訳 (1976) 精神診断学: 知覚診断的実験の方法と結果 (改訳版). 金子書房.
- 空井健三 (1969) Deviant Verbalization について: 距離による考察. ロールシャッハ研究 XI.
- 田中富士夫 (1958) ロールシャッハ・テストの形態水準評定法の研究. ロールシャッハ研究 I.
- 辻 悟・藤井久和・林 正延 (1963) 基礎形体レベル判定基準について. ロールシャッハ研究 IV.
- 辻 悟・河合隼雄・藤岡喜愛・氏原寛編 (1987) これからのロールシャッハ: 臨床実践の歴史と展望. 創元社.

(1994年9月14日 受稿)

ABSTRACT

A Review on the Form Level Rating of the Rorschach Test

Hiroyuki UCHIDA

In this study, the form level rating scale of the Rorschach Test is discussed. The form level rating is the qualitative evaluation of the Rorschach responses and has the pathological significance to examine the reality-testing. There is a variety of schools in the Rorschach Test; Rorschach, Beck, Hertz, Klopfer, Exner, Mayman, Phillips & Smith, Rapaport, Kataguchi and Osaka Uni. and so on.

First, an outline of a variety of schools is given. For example, Beck, Hertz and Exner use the frequency table of responses. And another type of school, e.g. Klopfer and Osaka Uni., includes three independent steps and an all-inclusive rating scales. But, unfortunately, corresponded opinions between them have not been acquired.

For the clinical application of the form level rating, this point must be emphasized; that is, the adequate distance in responses, which is compared to the play in the machine, should be examined. It is useful for understanding the ego-autonomy in the form-perception. After this review, further discussions on the form level rating are hoped through researches and case studies.